ロダン「沈思の人」の除幕演說

ロダンの作「沈思の人」Penseur は千九百六年四月二十一日巴里パンテオン堂前に据着けられ、ヂュジアルダン・ポーメッツ氏の司會で除幕式が擧げられた。ヂュジアルダン・ポーメッツ氏に續いてムーレー氏がした演說は特に紹介する必要があると信じて玆に譯出して見た。（編者）

ガブリエル・ムーレー氏はロダンの作を政府へ引渡し、その委員一同に代り、如何にして、熱誠なる寄附者達の庇護に依り「沈思の人」が偉人の祀、パンテオン殿堂の門前に建てらるゝに至つたかといふことについて縷々述ぶる所があつた。

皆さん

私は玆にロダンの「沈思の人」を政府の手に渡しました。此の處に斯うして置かれるといふのは眞に恰好なことゝ存ずるのであります。そして賛成し寄附して下さつた諸君、「生命の藝術」誌に依つて企てられた醵金後援會の委員諸彦、政府の方々及び吾人をしてその目的を最後まで遂行せしめ、今日またこゝに相會して淸らかな藝術的祭典を擧ぐることが出來ますやうに色々無形的に有形的に力を協せて下すつた諸君へ、厚く感謝の意を表するものであります。

吾々は一つの夢想を抱いてゐました、が幸にこれらの方々のお蔭に依つて實現しうるに至つたのであります。これらの方々のお蔭に依つてロダンの作品、遍く世界の賞讃を博した傑作、おそらくロダンの第一の傑作なるこの作が、祖國が深謝してそが偉人にのみ捧げられたる殿堂の閾の前に建てらるゝに至つたのであります。世にも卓越せるその高雅と權威とを以て「沈思の人」は既にこの榮えある席を占めて居つたことを考へますと、いつか、怡々揚々として、光明のうちに「沈思の人」が來つてこの席に着くことあるがためにのみ、かくも長く空席のまゝ置かれてあつたとも申されるのであります。

今より六百五十年前のことであります。フローランスの人々がシマビュエの「譽れの聖母」を、大騷ぎをして行列作つて聖マリー・ヌーヴェル寺へ持運んだことがありました。「花の市」は歡喜に滿ちてゐました。貧しきも、富めるも、藝術家も、市氏も、貴族も、なべてひとしくこの名畫を拜せんとて押かけたのであります。彼等の市に、その天稟の才に依つて榮耀たるほまれの一線を加へたる人を一時も早く賞め稱へ頌揚せんとて押かけたのであります。

今パンテオンの前に「沈思の人」を移し來つて巴里の人々の前に捧げ、即ちわれ〳〵自身にこの傑作を呈して、そを壽ぎ祝せんがために、自らの手して土をねり、精神を打込み以てこの崇高にして感嘆おく能はざる「沈思の人」の像に潑溂たる生氣を與へたる大藝術家の周圍に會して、吾々は十三世紀のフローランスの人々と等しき擧に出で、嘆賞、歡喜、美と理想に對する熱愛とを以て同じ儀式を營めるものであります。「沈思の人」をことほぎ祭り、ロダンが榮えをたゝへ、われ〳〵自らをはふりよろこぶものであります。

皆さん、眼を上げてこの生命の躍動せる靑銅の凝塊を御覽なさい。「地獄の門」の頂きから、吾々の間にロダンが「沈思の人」を下したといふのは如何にも尤な次第ではありませんか。御覽なさい、それは最早撓むべからざる教義の前に憐憫と恐怖に壓し潰されて罪と贖の深き淵の上に宙ぶらりをしてゐる詩人ではありません。悲哀の市の痛ましい巡禮者でもありません。また、奇異な生物、半神的英雄、超人、豫定選民でもありません。それは何んでもない一人の男、苦痛、好奇心、省察及び喜悅、探究と研學の澁くして又甘い喜悅を有つてゐる吾々の兄弟に過ぎないのであります。怠けた無爲の者でもなければ天命に安じた者でもありません。彼は生を卑んで深き冥想に沈んだまゝ遂に眼覺めぬであります。難行苦行の禁慾主義の輩はその小さな足を以て人道の方に進んでゆくことが出來ないのであります。又その手は現實を消し滅するためにはあまりに劣弱であります。けれど「沈思の人」は如何でありませう。彼が立

上つて歩みゆくを御想像なさい。彼は頭の要する作業、有効なる精力、意識的の努力、創造の意志などのすべて此等の諸所作が出來るのであります。彼はその權利として生と自由とに戰ふことが出來ませう。思想の、眞勇の、藝術の、美の、自己の種屬の文明の、遺産を守るためには一命を抛つことも出來ませう。

思ふに人々も記憶してゐるでありませうが、吾々は先づ第一、街路の蠢動と鳴動と熱中と搖動との間にあつて、人類活動の永久に止まぬ潮の滿干を支配し、寸時として絶ゆることなく、すべての者にそが爽快なる力を示し與ふる「光の市」の十字街頭の一つに於て、群集の胸底深くこの「沈思の人」の住めりしを祝福したのであります、吾々の鬪爭、吾々の生活により直接に混交せるものあるを祝福したのであります。

然しルソー、デオルテール、エッガール・キネー及び我が最大詩人達のなきがらの安らかに眠りつゝある墳墓のかどに於ける無名の「沈思の人」の出現は彼等に大なる意味を與へるものであります。斯くて彼は吾々が光榮のもりべとなり、譽れの地のまもりとなつたのであります。彼は冥想して過去のをしへの思ひに耽り、嘗ては彼もその一人であつた人類家族の傳統と偉大さとを校計し、地下陰暗きほとりに休らう英雄の聲音をきゝ、征服者のごと短刀直入邁進して事に當るに先立ちて沈思して居るのであります。皆さん、ロダンの「沈思の人」は實に近代に於るコレオーヌであります。なほ一言、ほんの少し申上ます。

今日吾々の間に一人の人物が出でねばならないのでございます。最も上席に、ロダンの傍に、その人の席は既に設けられて居るのであります。吾々はこの人物を徒にのみ待つてゐるといふ事を知つて遺憾に堪へないのであります。大藝術家、誠なる大人物、あゝ、その人の美しくして感動せしめではおかざる言の葉を吐きえた聲は消え去つてしまひました。外觀を眺めていと深刻に内部の秘密を迄洞察するを得しその人の眼は永遠に閉されてしまひました。思想の躍動と微妙なる靈動をよく顏面の上に表はし雅かに剛健に表現し得るその人の腕は遂に萎えてしまひました。死は、靈の力に滿ち成熟せる天才に滿ちしその人を奪ひ去つてしまつたのであります。吾々は二度ともうその人を見る事は御座いますまい。

皆さん、ウージェーヌ・キャリエール氏は、アルベール・ベナール氏と共に吾が委員會の名譽總裁たることを快諾して下さつたのであります。そして吾々の發起に賛成し「沈思の人」即ち氏自身の言葉を以て申しますと「内部生命の熱中に於て忠實に殘されし物」の榮えある日に出席せんことを前以てよろこんでうけがつて下さつたのであります。で、氏を知り氏を愛する吾々に取つては、氏の精神の氣高さと、その思遣りの心の深さとを測り得る吾々に取つては、又、思想といふもの〻敬愛に一身を捧げて倨然として屈せざる存在の思ひ出を誠心こめて憶し置く吾々に取つては、この盛典に當つて氏が記憶をもあはせ記して以て忘れぬのが宗教的義務といふものではございますまいか。如何ともすべからざる運命の嚴酷といふものがあるとはいへ、氏は依然として、いや永久に我黨の士だからであります。……ルコント・ド・リールは、彼には例なるニルヴァニズムの發作のその一に於て死生の境を超越し

物思ふ愧かしめと一人のひとたるべき恐れ。
La honte de penser et l'horreur d'être un homme.

を最早知らなかつたのであります。

時間と季節の色々な節奏の下にあつて、頭上には限を知らぬ大空を頂き、聖なる墻壁より落つる沈默の内にあつて、ロダンの「沈思の人」は、ルコント・ド・リールとは反對に、來るべき世紀々々の代々に、苦しみ惱む人々に、爭鬪をなす人々に、望を抱く人々に、拮据していたづく人々に、いつくしみ愛する人々に、生活を營む人々に、一言にて申さば

物思ふほまれと一人の人たらむとする衿り。
La gloire de penser et l'orgueil d'être un homme.

を敎へるでありませう。